

# 美しく生まれたばかりに

小川未明

青空文庫



さびしい、暗い、谷を前にひかえて、こんもりとした森がありました。そこには、いろいろな小鳥が、よく集まってきました。

秋から、冬へかけて、そのあたりは、いつそうさびしくなりました。森は陰気な顔をして、黙っていました。そのとき、眠りをさませるように、いい声を出して、こまどりが鳴きました。

これを聞くと、森は、元気づいたのです。

「あの美しいこまどりがきたな。どうか、この森に長くおつてくれればいい。」と、木立は思ったのでした。

多くの木立は、自分の枝へ、毎日のようにくるたくさんの小鳥たちを知っていました。しかし、どの鳥も、こまどりのように、美しく、そして、いい声をだして鳴くものがなかった。

「どうか、私の枝へきて、こまどりは止まってくれないものかな。」と、一本の木立は、考えていました。

ちやうど、そのとき、そこへ飛んできたのは、やまがらと、しじゅうからでありました。

「たいへんに、寒くなりましたね。嶺を吹く風は身を切るようです。しかし、この森は、奥深いから、いつ雪になっても、私たちは、安心ですが……。」と、鳥たちは、話をしています。

木立は、それを聞くと、自分も、じつに寒くなったように身震いをしました。

「しじゅうからさん、山のあちらは、暴れていますか？ そういえば、もう雲ゆきが速くて、すっかり冬ですものね。また、雪の中にうずもれることを考えると、まったく、いやになつてしまいます。あなたたちは、しあわせものですよ……。」と、しみじみとした調子で、木立は、いいました。

やまがらは、その枝で、一度もんどりを打ちました。

「私たちがしあわせだつて？ ……それはちがいますよ。一日、風に吹かれて駆けまわつても、このごろは、虫一匹見つからないことがあります。それに、これからは、雨風に追われて、あちらへ逃げ、こちらへ逃げなければなりません……。」と、やまがらは、答えました。

「だつて、そうして、自由に空を飛べるのじやありませんか。私たちは、永久に、ここにじつとしていなければならぬ運命にあります。こうして、毎日、同じような谷

川にがわの音おとを聞きいていなければなりません。先せん刻こくでしたか、こまどりさんの歌うたを聞ききました。が、いつも、よい声こえですね。」と、木立こだちは、うつとりとしていました。

「ほんとうに、あのこまどりこそ、しあわせ者ものです。どこへいっても、森もりや、林はやしに、かわいがられます。森もりじゅうの木立こだちが、どうか自分じぶんの枝えだにきて止とまってくれればいいと思おもっている。私わたしたちが、せつかく、一夜やをそこにあかそうと思おもって止とまると、枝えだが意い地じ悪わるく、夜よ中に、私わたしたちの体からだを揺ゆすつて、振ふり落おとそうとする。それに、くらべれば、同じ小鳥ことりどうまれて、こまどりは、ほんとうにしあわせ者ものであります。」と、二羽わの小鳥ことりは、口々くちぐちにいいました。

木立こだちは、さすがに、気恥きはずかしく感かんぜずにはいられなかつたのです。

「いえ、私わたしだけは、そんな意い地じ悪わるくはありません。だれでも、私わたしの枝えだにきて止とまってくだされば、ありがたく思おもっています。どうか、こんなさびしい日ひは、よそへゆかずに、ここにおいて、いろいろごらんなされた、おもしろい話はなしをしてくださいませんか。」と、木立こだちは頼たのみました。

このとき、風かぜが、またひとしきり強つよくなつた。やまがらは、驚おどろいて、飛とび立たとうとして、「それよりは、私わたしは、昨日きのう、嶺みねのあちらで、はやぶさにねらわれた。もうすこしで捕とらえ

られようとしたのを、いばらのやぶに逃げこんで助かったが、こうして、風が、ふいに吹くと、また、はやぶさにねらわれたかと思つて、びっくりする……。」「と、しじゅうからにいうとなく、独りで思いだしていいました。

「ほんとうに、そうした話を聞くと、自由に空を飛べるあなたたちにも、いろいろな苦労があるのですね。」「と、木立は同情しました。

いつしか、あたりは、暗くなつていった。そして、谷川の水が、あいかわらず、単調な歌をうたっているのが、あたりが、しんとすると、いつそうはつきりと聞こえてきました。

空を見ると、雲切れがしているその間から、一つ星が、大きな目で下をじつと見下ろして、木立に止まつている小鳥たちが、熱心に、風に動く枝と話をしているのに、耳を澄まして聞いていました。

「ねえ、空のお星さま、ここに、いつもこうして、じつとして動けない私たちと、このかわいらしい小鳥さんたちと、どちらが、幸福なものでしょうかね。何事も、あなたは、わかつておいでなさると聞いていますが、どうか、教えてくださいませんか。」「と、まだ、そんなに、この森の中では年をとつていない木立が、快活に、星に向かつてたずねまし

た。

星は、急に、問いかけられて、急がしそうに瞬きをしました。それから、じつと態度を澄まして、おちついた調子で、

「地上に、すむものは、よいも、悪いもない、みんなの運命は同じなんです。」と、答えた。

すると、こんどは、小さなしじゅうからが、黙っていた。

「星さん、星さん、そうじゃないでしょう。いい声のこまどりは、どこへいっても、森や、林たちばかりでない、人間からもかわいがられます。私は、ああいういい声を持って、美しく生まれてきたものが、幸福だと思わずにいられません。」といいました。

木立は、しじゅうからの言葉に、しきりに同感をして、頭を振っていた。すると、星は、いちだんと清らかな光を増して、大きな目をみはったように、

「そう思うのも無理はありませんが、どうして、それが、終生の幸福だといわれま  
すか……。そのためにいいこともあれば、また、悪いこともある。空から、見ているとよ  
くわかりますよ。」と、星は答えたのです。

風は、ますます強く吹いてきました。黒い雲が出ると、せつかく、のぞいた清らかな星

の光も、跡形もなくかくしてしまいました。

小鳥たちは、ついうかうかとして、時のたつたのに気づかなかつたが、まったく、暗くなつてしまうと、おのおのの友だちのいるところを探して、あちらとこちらで呼びかわしながら、森の深くへはいつてゆきました。

明くる日の暮れ方のこと、雪がちらちらと風にまじつて降つていました。こまどりは、ひとりいい声で、この木立に止まつて鳴いていました。

「ごらんなさい。あなたが鳴きますと、ほかの鳥たちは、みんな黙つてしまうではありませんか。たまに、こうして、あなたがたずねてきて鳴いてくださるので、私たちは、さびしい、こんな山中にいてもなぐさめられるのです。今夜は、雪になりそうです。晩は、この森の奥へはいつて、お休みなさいまし。」と、木立がいました。

「きのうは、あちらの山にいつてみました。夕焼けが赤かったから、雪になろうと思つたのですよ。自分の唄が、西の空へ響くような気がしました。」と、こまどりは、自分の声を自慢したのです。

「こまどりさん、ほんとうに、今夜にでも雪が積もつたら、明日は、あなたは、ふもとの方へいつてしまわれるでしょう。そうすれば、また、春がくるまで、あなたの歌を聞くこ

とができないのです。どうか、もう一つ歌ってくださいませんか。」と、木立はたのみま  
した。

こまどりは、寒い風に吹かれながら、谷の方を向いて、ほがらかに、さえずりはじめま  
した。このとき、あちらから、矢を射るように、黒いものが飛んできたかと思うと、こま  
どりは思わず、すくんでしまった。それといっしょに、木立は、

「あつ！」といつて、声をあげました。

はやぶさが、こまどりを狙って、それを捕らえたからです。

なぜ早く、森の中へ、隠れなかつたかと、木立は、気をもんだけれども、はや、なんの  
役にもたたなかつた。

「はやぶささん、どうか、そのこまどりの命だけは、取らないでください。」と、木立は、  
はやぶさに訴えました。

「あまり、こいつが、いい気になって、自分の声を自慢するからさ。」と、はやぶさは、  
こまどりを片脚で押さえつけて、いました。

「なにも、あなたに、悪いことをしたのでありますまい。私が、頼んで、唄をうたつても  
らつたのです。あまり、今日は、あたりが陰気で、寂しいものですから……。」「と、木立

は頼みました。

はやぶさは、目をくるくるさしていましたが、

「ほんとうに、寒い、さびしい日だな。こんな日には、小鳥どもも、目につかない。こいつは見たところは、きれいだが、毛色ばかりで肉がまずいので、あまり俺は、好きでない。そんなに、おまえがいうなら、こいつの命だけは、助けてやろう。そのかわり、こんど、小鳥が、ここへ飛んできたなら、おまえは、頭でも振って、俺に知らせてくれい。」と、はやぶさはいいました。

木立は、こまどりが助けられたので、うれしく思った。しかし、はやぶさは、すぐに、こまどりを放してやろうとはしなかったのです。

「おまえの命は、助けてはやるが、今夜、一晩、こうして、俺の脚を温めさせろ！」と  
いって、はやぶさは両脚で、こまどりの体を踏みつけたのです。こまどりの体は、  
押しつぶされそうになって、声もたてられなかった。

木立は、なんとという残酷なことをするものだろうと、これを見るのにしのびませんで  
した。が、じきに、暗く、暗くなって、すべての光景を、夜が、隠してしまいました。  
夜が、ほのぼのとあけかかったとき、木立は、こまどりがどうなったかを見ると、はや

ぶさは、もはや、そこにはいませんでした。あちらの嶺の方へ、早起きする小鳥たちの声を聞きつけて、これを捕らえて飢えを満たすために、飛んで行ってしまった後です。そして、こまどりだけが、哀れげなようすをして、くちばしで、自分の体の毛の乱れを直していました。

木立は気の毒に思つて、声をかけることもできなかつたのでした。

ちらちらと降つた、雪を清浄に照らして、朝日が上りました。

こまどりは、そうそうに、木立に別れを告げて、ふもとの方をさして急ぎました。その後へ、先日（せんじつ）のしじゅうからが飛んできて、木立から、はやぶさとこまどりの話を聞いて、小さなくびを毛の中にすくめたのです。

「こまどりは、町へいっても、殺されるようなことはありません。しかし、先日のお星さまのいったように、なにが幸福となり、また、不幸となるかもしれない。私どものように、だれからほめられるということのないかわり、自由に空を翔けることができ、しあわせであるかもわからない。こんな皮と骨ばかりの私どもを、はやぶさだつてねらいはしますまいから……。」と、いったのです。

ちようど、このとき、こまどりは、平原の上を飛んでいました。見たすかぎり、初

雪ゆきにいろどられて、白しろい世界せかいの中なかを、金こん色じきの帯おびのように、河かわが流かわれ、田圃たんぼは、獸物けだものの背中せなかのように、しまめを造つくっていました。

昼ひるごころのこと、こまどりは、地平線ちへいせんのかなたに浮うかび出でた、華はなやかな町まちを見みました。

「まあ、なんとという輝かがやかしい町まちだろう。人間にんげんがここに住すんでいるのだ……。山やまにいるとき、よくほかの鳥とりたちが、おまえさんは、羽はねの色いろも美うつくしいし、声こえもいいから、人間にんげんにもかわいがられるだろうといったことがあつた。もし、人間にんげんが、私わたしをかわいがつてくれるなら、私わたしは、どんなにしあわせかしれん……。」と、こまどりは、高たかい木きに止とまって、独ひとり言ことをしていました。

町まちの建物たてものは、日ひに輝かがやいて、煙突えんとつから白しろい煙けむりがおもしろそうに、雪晴ゆきばれのした、青あおい空そらに流ながれて消きえていました。このとき、すずめが、軒端のきばの方ほうから二羽わと飛とんできて、こまどりの止とまっている、下したの方ほうの枝えだに止とまって、話はなしをしていたのです。

「あの、美うつくしいお嬢じょうさんの家いえにいたのと、同おなじい鳥とりじやないか？」

この言葉ことばを聞ききつけた、こまどりは、すずめの方ほうを見み下おろしました。そこには、見慣みなれない二羽わとの鳥とりたちが、自じ分ぶんのうわさをしていたのでした。すずめは、山やまの奥おくにはすんではないなかつたからです。

「もう、一度、いまのお話を聞かしてくださいませんか。」と、こまどりはやさしく、いきました。

すると、すずめは、おしやべり者ですから、

「この町で、いちばんりっぱなお家なのです。そこのお嬢さんは、評判の美人ですが、あなたと同じ鳥が、このあいだまで、かわいがられて、飼われていたのですよ。それが、このごろ、逃げたとみえていなくなつたのです……。」といました。

「それは、どのお家ですか？」

「あの森の中に見える、高い家が、それですよ。」

こまどりは、いいことを聞いたと思つて、すぐに、その家の方へ飛んでいった。そして、庭の桜の木に止まつて、いい声を出して鳴きました。たちまち、窓が開いて、美しいお嬢さんが、顔をだしました。

「まあ、いいこまどりだこと、家のが帰つてきたのかもしいわ。」といつて、お嬢さんは、きれいなかごの中へ、こまどりの好きそうな餌を猪口に入れて、かごの戸をあけて、木の下へだしました。

こまどりは、木の上で、これを見ながら、しばらく考えていたが、だんだん下へ降りて

きました。そして、とうとうそのかごの中へはいると、くびをまわして、内のようすをながめました。このとき、お嬢さんが、飛んできて、戸を閉めてしまいました。

こまどりは、かごの中へはいつてから、なぜいままでのこまどりは、このかごの中から、逃げていったのだろうかというのを、青空を見ながら考えたのです。すると、彼は、急に自由を失ってしまったことに気がついて、かごの中で、騒ぎはじめました。

「すこし暗いところへ置いたほうがいいわ。」と、お嬢さんは、奥の座敷へ、かごを持ってきました。こまどりは、はじめて人間の住む家の内を見るので、珍しそうに見まわっていました。そのうちに、またたちまち悲鳴をあげて、狭いかごの中で狂い出した。あちらで、はやぶさが、こまどりをにらんでいたからです。

しかし、それは、床の間にかかっている、掛け物の絵であることがわかりました。そして、この小さな鳥にも、人間は、なんでも人間以外のものをおもちやにするが、めつたに幸福を与えるものでない、幸福というものは、自分だけの力で得られるものだと悟ると、いままでいろいろと目に描いた美しい空想は消えてしまった。

こまどりは、やはり、怖ろしいはやぶさのすんでいる、山の中が恋しくなりました。そして、いまとなつては、とりかえしのつかない、自分のはやまった生活を後悔したの

であります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集4」丸善

1930（昭和5）年7月20日

※表題は底本では、「美《うつく》しく生《うま》まれたばかりに」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 美しく生まれたばかりに

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>